

## 高雄曼荼羅金剛界四印会における大日如来の宝冠化仏について

中村 夏葉 (名古屋大学)

京都・高雄山神護寺には通称高雄曼荼羅と呼ばれる赤紫綾地金銀泥両部曼荼羅が伝来する。高雄曼荼羅は周知のように弘法大師空海が唐より請来した両部曼荼羅の転写本の一つであり、更には後に現図曼荼羅と呼ばれる真言宗系両部曼荼羅の現存最古の作例である。また空海在世時に建立された現存唯一の作例ということからも第一級の曼荼羅資料である。

これまで現図曼荼羅について美術史では、高田修・秋山光和・柳沢孝の三氏による『高雄曼荼羅の研究』(美術研究所報告、吉川弘文館、1967年)や石田尚豊氏の『曼荼羅の研究』(東京美術、1975年)を中心に数多く行われてきたが、これらの研究を含め、その他の曼荼羅研究においてもその中心は胎藏曼荼羅の諸尊にあり、金剛界曼荼羅の図像研究はあまり行われてこなかった。しかし実際には現図金剛界曼荼羅には解決すべき課題が多く残されている。そこで本発表では金剛界の四印会に焦点を当て、そこに描かれる大日如来像が着ける宝冠化仏の問題について検討を行う。

通常、大日如来像の宝冠は「五仏宝冠」や「五智宝冠」と呼ばれるように五体の化仏が表される。高雄曼荼羅においても金剛界一印会の大日如来像や胎藏曼荼羅の大日如来像も五仏の宝冠を着けている。それに対し四印会では四仏の宝冠を着けている。これについては従来全く指摘されてこなかった点である。四印会の大日如来像が四仏宝冠であることは、東寺甲本や高野山血曼荼羅にも認められる一方で、東寺西院本や奈良・子嶋寺の子島曼荼羅には認められない特徴である。即ち、四印会大日の四仏宝冠は現図系の大きな特徴とすることができる。

本発表では、先ず『大日経』に五仏宝冠を説かない胎藏大日と、『金剛頂経』に五仏宝冠が説かれていてもインドではほとんど図像化されなかった金剛界大日が現図曼荼羅において共に五仏宝冠を着けた図像として表された要因として金胎不二思想との関連を指摘する。それを踏まえた上で四印会の四仏宝冠について、高雄曼荼羅では中尊大日が四仏宝冠を着け、四方に配される四菩薩が金剛法菩薩を除いては化仏を着けないのに対し、『五部心観』所収の四印曼荼羅では中尊の如来が無化仏であるのに対し、四菩薩がそれぞれの本地となる四仏中の一化仏を着けているということから、高雄曼荼羅四印会の大日如来像が四仏宝冠を着ける理由を考察する。更に『金剛頂経』に説かれる六種曼荼羅における四印会の意味を考え、現図金剛界一図において四仏宝冠(四印会)と五仏宝冠(一印会)の大日如来像が描き分けられているのは、四印会大日は金剛界大日が金剛界四仏を宝冠化仏として金剛界五仏を表す像であるのに対し、一印会大日は金胎不二を表すために金剛界大日が胎藏五仏を化仏とする宝冠を着けた姿で表されていると結論付ける。